

注(4) 明治20年12月16日付奥羽日日新聞に、仙台での鉄道開業式のことを報道した記事に『午前七時二十分東京発の汽車にて……午後七時三十分の予定なりしも……漸く午後十時二十五分を以て着され〔大雪のため越河で立往生し一旦福島駅に引返したため〕……来賓一同の散会せしは午後十二時過ぎなりし』とある。

注(5) 既に「時」の表記が徹底定着した時代であったことを示す資料は、一般にも数多く残っている。「仙台繁昌記」(在竹小三郎、明治16年刊)『時器(トケイ)……方〔まさ〕ニ午前九時ヲ報ス……』

「復軒旅日記」(大槻文彦)『明治十二年八月八日午前二時に爰〔ここ〕を馬車にて発す。……午後三時過ぎたる頃高崎駅に着き……』

「仙台市史」(明治41年刊)『明治十九年十月八日文第五一五号達服務時間。自一月至四月 自十月至十二月、午前第九時より午後第四時まで……』。

資料 現行日本法規

新聞集成明治編年史第1巻

ものがたり東北本線史(日本国有鉄道仙台駐在理事室)

東北本線略史(「近代東北庶民の記録」上巻(NHK仙台制作グループ)の内)

59. 谷風 一 初代・2代

問 「広辞苑」の谷風梶之助の項を見ますと、『(初代)讃岐高松の人。多年大阪で活躍し強力無双と称せられた。生歿年不詳。(二代)陸奥の力士。江戸で関ノ戸の門に入り、1789年最初の横綱⁽¹⁾を許された。登場230回のうち負けたのは僅かに11回という。(1750-1795)』とあります。仙台の谷風は2代目なのでしょうか。

答 「広辞苑」の記事は不備で、初代・2代ともに仙台領出身の名力士です。それで仙台では、初代を鈴木谷風、2代目を金子谷風と呼び習わして区別してきました。

初代谷風は、本名鈴木善十郎。刈田嶺神社の門前町である宮村の生れ、家は代々片倉家の鉄砲組足軽でした。体格抜群で、初め明神森のしこ名で土俵に上り、後に谷風梶之助と改めました。江戸深川八幡社東西合併大相撲で西の天下無敵といわれた沖の舟を破って一躍その名が高まりました。その全盛時代は享保年間で、9年間勝放したという大力士で、讃岐高松12万石の松平家の抱え力士となりました。元文元年〔1736〕5月29日、高松城下で43才で歿しました。遺骨は生前の希望により、郷里白石の片倉家の菩提寺である傑山寺に葬りました。その墓は本堂後ろの丘の中腹にあり、

「法名薫風相谷善男 鈴木権之助」と刻まれています。

2代目谷風は、寛延3年〔1750〕8月8日、宮城郡霞ノ目村〔現在は仙台市域〕金子彌右衛門の第3子として生まれました。鎌倉武士国分氏の遺臣が旧領の各地に帰農して土着したが、谷風の生家もその一つでした。幼名を与四郎といい、明和5年〔1768〕19才の時、大力無双、体格抜群だった彼は、仙台出身の関ノ戸億右衛門に見出されてその門に入り、翌年には江戸の本場所を踏んでいます。安永5年〔1776〕谷風梶之助と改めました。それは、享保年間無敵と称せられた初代谷風を襲名したものであります。力士となってから13年目の天明2年〔1782〕2月に、西の大関に昇進しました。時に33才。それから7年目の寛政元年〔1789〕11月、40才の時吉田司家から横綱を許されました。谷風は、名目上白石片倉家の抱え力士となっています。谷風は安永7年〔1778〕3月から天明2年〔1782〕2月場所まで63連勝しております。この記録は、昭和13年5月場所11日目に、双葉山が武蔵山を倒して64連勝するまで、156年間誰も破れるものがありませんでした。谷風は身長6尺2寸5分〔1.89m〕体重47貫〔176.2kg〕、四肢の均整のよくとれた無敵不敗の大力士でした。その人柄もまたすぐれ、親に孝、友情に厚く、数多くの美談が残されています。寛政6年、45才を迎えた谷風は、3月場所・10月場所ともに全勝優勝して郷里に帰り、翌7年〔1795〕の正月を生家で迎えたが、流感にかかって正月9日、現役のまま、本場所308回に及ぶ総取組み中黒星わずか13の名力士は無敵の余韻を残して病歿しました。享年46。霞ノ目村の西入口近くに、⁽²⁾江戸の方角に向けて葬られました。昭和17年11月10日霞ノ目飛行場拡張のため、飛行場東の現在地に墓を移しました。墓碑には「日本一天下開山最手〔はて〕横綱 行年四十六歳 釈姓谷響了風正定位 谷風梶之助源義則墓」とあり、これに並んで「釈尼菽軸広野正定位 文化六己巳〔つちのとみ〕歳九月 東医太田左金吾源資広三女也 同人妻名秀 行年五十三歳卒」と刻まれています。この年の秋、菩提寺である南鍛冶町東漸寺に碑が建てられました。今「谷風の碑」と呼ばれているものです。これには諱守胤とあります。今日の相撲の制度・組織の基礎が確立したのは、実にこの古生まれな大力士谷風の出現が、きっかけとなったのだといわれます。

注(1) 元来は力士の階級でなく、大関のうち特に優秀な成績の者に与えられた栄称であった。普通には明石志賀之助・両国梶之助・丸山権太左衛門〔寛延2年（1749）遠田郡中津山村（明治以後登米郡に入る、現米山町）に生れ37才で死亡）を横綱の1代・2代・3代とし、谷風を4代とするが、明石・両国・丸山の横綱は伝説的なもので、谷風を初代横綱とする説が圧倒的である。「近世名力士伝」（安藤英男）にも『要するに、谷風以前は伝説で、明治に入ってから、当てはめたものである。谷風以前には戦績の現存するものがなく、たしかな番付もないので、実際には、谷風をもって横綱の始祖とするのが妥当であろう。』と記している。

注(2) 明和6年〔1769〕から寛政6年〔1794〕まで26年間の戦績である。当時の本場所は年2回、1場所10日間の取組みであった。「仙台市史」第1巻の『力闘2764回の内、敗を

とる僅かに4回』とあるのは、どのような資料によったのかわからない。

注(3) 昔の節会〔せちえ〕相撲力士の最上位の称、後世の大関にあたる。

資料 宮城県史第18巻

仙台市史第1巻

仙台人名大辞書（菊田定郷）

仙台郷土史夜話（三原良吉）

仙台と相撲（三原良吉）

近世名力士伝（安藤英男）

仙台昔話電狸翁夜話（伊藤清次郎）

60. 仙台の達磨を松川達磨と 呼ぶのは

問 仙台の達磨を松川達磨と呼ぶことがあるのは何故ですか。

答 「仙台事物起原考」（菊地勝之助）には次のように記されています。『仙台地方の旧家を訪ねると、神棚などに大小幾つかの達磨をずらりと並べ祀っているのを見ることである。これが仙台北産の松川達磨である。この達磨は藩政時代、伊達藩の藩士松川豊之進の創作したものといわれている。そしてそれ以来、藩内の小禄の藩士らの内職として製作したものらしいが、その技術と構造形式とは共に独特なもので、特にその着色と表情とがよく統一された絢爛たる郷土作品である。顔は眉毛だけ毛を植え、眼玉はガラスを入れてあり、体の部分は赤地に福神とか宝船・梅の花などを描いている。小は三・四寸から大は三尺に及び各種の型があり、かつては例年の歳の市・仲見世とか、岩沼の竹駒神社の祭典の折などに売出されたものである。これは郷土玩具としてよりも、むしろ信仰の対象として大衆から愛玩されている。』だから松川達磨と呼ぶのであると、一般には伝えられています。

ところが、関善内氏の専門的な研究によると、松川達磨の名は近年になって呼び始められたもので、以前は単に達磨とだけ言われていたということです。その調査の結果では、松川達磨というのは、昭和に入ってから呼び名であり、松川豊之進という人物の存在そのものが疑わしいといわれます。そして、達磨そのものが独特の構造と技術、描彩の着想や表情が今日見られるように完成したのは、明治初年面徳の改良によるものなそうです。それ以前の達磨は、赤衣に宝珠が白く描かれただけの単純なものでした。このことから、創作者松川豊之進の姓を取ったという説は否定的です。⁽¹⁾